

俳句 大津俳句会

醉芙蓉朝から少し召されしや

井芹眞一郎

雑魚寝また楽しく子らの夏座敷

秋山 恵子

思ひ出の家の解かれてカンナ咲く

市原 初女

仏前に活けて明るく花鬱金

江藤 みち

日々草こぼれ種より嬉しき芽

大塚喜久子

奥阿蘇の風のかたむく芒原

岡崎 浩子

連峰に片足沈め朝の虹

坂本 セキ

手花火をやうやく持てる小さき手

佐賀 久子

山峡の深き底より星月夜

堀川 妙子

精霊船街ねり歩くよもすがら

松尾 昭雅

糠床の匂ひ残る手夜の秋

渡邊佳代子

俳句 つのはな句会

母負つてひまわり畑の迷路まで

星永 文夫

朝顔や生・老・病・死からまつて

矢嶋 道子

風光る 喜寿を祝つて鳥になら

水野 春子

秋風がこいしい 今日の暮れです

梅木トキエ

夏霞 ロボット^{うごめ}蠢く医療の森

塚本 洋子

野仏の掌^てに空蟬のしがみつく

榮田しのぶ

火種の浮標^{ぶい}ぶかぶかと夏の海峡

志賀 孝子

消せない昭和と蝸^{ひぐらし}のぬけがら

田上 公代

入道雲湧いて真実^{かくしん}攪乱す

木庭 杏子

薄れゆくガリバン刷りの終戦忌

上杉 波

短歌 大津短歌会

久々に逢いし友なり昔日を

語りて和む天草の宿

吉永 恵子

逆光のオレンジ色の空に浮く

阿蘇山脈の美のシルエット

豊岡ミツル

検診は受けたがいいよと友の声

見舞い帰りの耳朶に残れり

渡辺佐代子

震災の痕残る集落に

降り注ぎおり早春^{はる}の陽光^{ようこう}

鞍 岳志

看^{すべ}とりしも術なき命^{みだ}弥陀さまの

加護に委ねて君逝き給う

菅野 静

夏祭り孫が買いたる金魚等は

一匹を残し皆んな死にたり

小平 善行

短歌 万年青短歌会

風かほる令和五月に目の手術

明るき視野の七十路をゆく

磯崎テル子

明け方に鳴くホトトギスの声に似せ

われも鳴きたり特許許可局

山内 信子

庭先に植えし山椒はこの梅雨に

気負いしごとく日毎伸びゆく

中山 春代

今は亡き友の名呼べば木霊して

友の名返るこの山あいに

合志 妙子

待ちに待ちし雨降り出せばホトトギス

鳴きいでにけり声のさやけさ

合志 桃花

※万年青短歌会の掲載は
今月号で最後になります。